

能代 4 100000102  
佐賀東 3 100020000

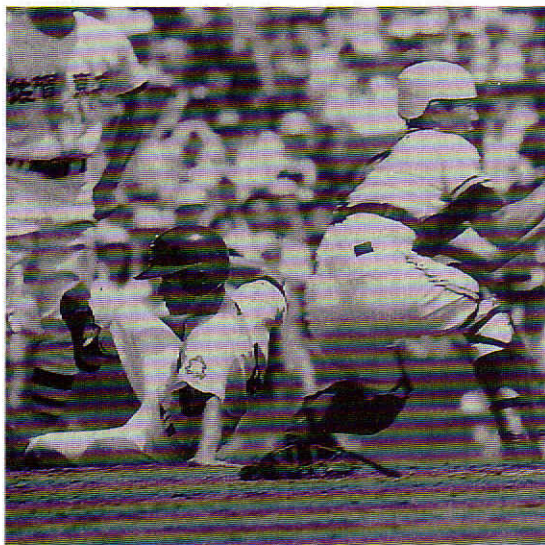
【能代】	打	得	安	点	1	2	3	4	5	6	7	8	9
(中) 池端	5	0	0	1	三振	右飛	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振
(右) 柳谷	5	0	0	0	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ
(左) 大塚	4	1	2	0	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振
(捕) 加藤	3	0	1	0	四球	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振
(投) 成菊	4	1	2	1	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振
(一) 池地	3	1	1	0	二ゴ	三ゴ	三ゴ	三ゴ	三ゴ	三ゴ	三ゴ	三ゴ	三ゴ
(三) 福司	4	0	1	0	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振
走二	川原	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(二) 根	原	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(遊) 三根	訪	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	土崎	4	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	残塁	7	34	4	8	3							

【佐賀東】	打	得	安	点	1	2	3	4	5	6	7	8	9
(中) 中尾	3	1	1	0	四球	中飛	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振
(捕) 野田	4	0	2	0	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振
(遊) 平中	4	0	0	1	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ
(右) 川原	4	0	1	0	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振
(左) 石井	3	0	0	0	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ	二ゴ
(一) 永石	3	0	2	0	四球	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振
(三) 小笠	原	3	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(投) 角	2	0	0	1	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振	三振
打片	淵	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(二) 納富	2	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
打塚	本	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	残塁	9	30	3	8	2							

【二塁打】大塚 2 永石 菊地 成田  
【盗塁】池端 川原 中尾 2 平田 4 小笠原  
納富 3 【併殺】佐賀東 1 【失策】能代 2 佐賀東 3 【暴投】角 2

投手	回	打者	安	振	球	責
成田	9	39	8	4	4	1
角	9	38	8	5	3	3

【審判】(主)夏目 (塁)田中 松田 久保田



も浮き足立つてきた。福司サイドゴロ。サイド小笠原この処理を過つて、走者一・二塁。諏訪のゴロをショート野中エラー。打者土崎の時、角投手の暴投で菊地生還。1点差に迫り、なおもワンアウト走者二・三塁。一打逆転のチャンスだ。ここで、沸かなければ応援団ではない。もちろん応援は沸きに沸いた。いいぞ、いいぞ、能代。カッシー、カッシー、土崎。ここで一発、池端。しかし、応援空しく、土崎三振、池端三塁ゴロで二塁走者諏訪タッチアウト。アー、逆転のチャンスははかなく消えた。

さーア、あと1点だ。まだまだいけるぞ。絶好の逆転機を逃した能代のOB応援団は、少々ヤケ気味。時折だれかが意味不明の奇声を発する。

7回裏 デッドボールの納富の二盗・三盗。しかし、1死後、平田のスクイズは成田の好守ではばみ、納富を本塁でタッチアウト。平田盗塁。ここで成田の投球は百球を超えた。

わが三塁側のコンバット・マーチがありきたりで少々あか抜けないのに引き換え、一塁側応援団が演じるフレンチ・カンカンのメロディーがヤケにスマートに聞こえる。

8回裏 先頭の川原田センター前ヒット。石井の送りバントで二塁進塁。さらに、永石の一・二塁間ヒット。二塁走者勇躍ホームを突き、あーア、ここでダメを押されたかと思つたこの時、ライト柳谷の見事なバックホームが佐賀東の追加点を封じた。

好守の連続で何とかしのぐものの、当初押し気味だつた試合も、4回以降はさっぱり。佐賀東1点のアヘッドに気の短いOB応援団の中には、早くも「寄付返せー、キフカエセー」コールを始める者もいる。しかし、このコールはもちろんみなさん、ご存知の能代標準語。バッター成田君には「キシカイセイ、起死回生」

と聞こえたかどうかは知らない……。

堂々横綱のうつつちやり劇

9回表 成田センター前にポトリと落ちるヒット。一瞬の隙を突いて一気に二塁打とする。菊地の送りバントで三進。続く福司は三塁強襲のヒットを放ち、代走川原に代わる。川原すかさず二塁盗塁。諏訪四球で1死満塁。

こうなると、さつきの「寄付返せー」コールはどこへやら、寄付も現金ならば、応援も現金。一転して一気に逆転を期待する狂気になる。

これまでノーヒットの土崎ライト前ヒットで、成田同点の生還。池端セカンドゴロでダブルプレーかと思つるも、駿足池端一瞬一塁セーフ。ダブルプレー崩れの間に、つい先頃亡くなられたお母さんの遺影の声なき応援が後押ししたか、川原が逆転のホームを駆け抜けた。



## 甲子園への道のり

自主性尊重の反管理野球で  
晴れの甲子園出場を勝ち取る

ヤッター、やったー、やりました。これぞ、能代高野球の神髄。敵をぎりぎりまで喜ばせておいて、最後にひっくり返す（本当かな?）。名前も知らない者同士が抱き合つて喜ぶ。誰だ? どこのどいつだ。出てこい! つい今しがた「寄付返せー」と怒鳴つたのは。今まで生きてきた中で、いちばん幸せ、という顔をしているあの人だな、きつと。上申書ぐらいいではすまされんぞ、つたくモー。

9回裏 セカンド諏訪がサードに回り、セカンドに根市が入る。代打の2者をなんなく封じるも、粘る佐賀東高中尾ライト前ヒット。平田サード諏訪の前にセーフティバントヒットを決める。さらに中尾・平田のダブルスチールも成功して、走者二・三塁。一打逆転のピンチもピンチ、大ピンチ。現役応援団必死の声援。OB応援団かたずを飲んで成田の投球を見守る。しかし、さすが、東北球界にこの人ありと言われる快腕成田。佐賀東の主砲野中をライトフライに討ち取つて、試合終了。

勝つた、勝つた。勝つてしまった。何がなんだかわからず誰かれかまわず抱きついて飛びはねる。知る人ぞ知る、知らない人は知らなくてもいい。これぞわが校の甲子園初勝利なのだ。昭和三八年の勝利は西宮球場。四度目の出場で、始めて甲子園に流れる「そのかみはるか域闊く〜」なのだ。ポールを滑るように昇る校旗も、あらためて見るとなかなかいい。何人と握手をしたのだろうか。手が腫れ上がってしまった。

振り返れば、反省すべき点は多々ある。しかし、にもかかわらず勝つた君たちは強いのだ。勝つというこはいいことだ。勝つて大いに驕るべし。

七月十八日、八橋球場で開会式が行われた秋田県予選。県内屈指の本格派成田、速球派村上の二本柱を擁し、春の県大会優勝の実績から、優勝候補の筆頭とみなされていた。しかし、二十日の初戦対大曲工高こそ十五対二、成田が十一三振を奪い、7回コールドと軽く一蹴したものの、三回戦以降は、やや投打がかみ合わず、予想外の苦戦の連続。チーム打率は三割三厘と不振。頼みの投手陣も予想外の失点を重ねた。だが、この苦戦がチーム全体を犠打、盗塁からめた細かい野球ができる試合巧者に成長させた。三回戦は、粘る鷹巣高に十本の長短打で七対四と競り勝つ。

準々決勝の対西目戦は、苦戦も苦戦大苦戦、チャンスに決定打がなく、8回まで一対二とリードを許し応援席を冷や冷やさせた。9回一死満塁、七番柳谷が初球を左中間にタイムリー三塁打、結果は五対二ながら薄氷の勝利だった。続く準決勝。春季大会で3試合連続の特弾を放つた大塚が、夏の予選にきてやや不振。代わって福司がホームランをたたき、好守の連続で本荘高の追撃を押さえた。

迎えるはいよいよ決勝戦。対する相手は前年度に苦杯を喫した金足農高。もうあと一歩という気が先に立つのか、またまた苦戦。敵もさる者、簡単には甲子園への道を明け渡してはくれない。池端の二塁打でついに勝ち越し。最後は成田投手が本領発揮。最後の打者を、キャッチャーフライとファーストフライに討ち取り、追いつがる金足農を六対五とねじ伏せた。

## 少年の日の 六十キロ行軍追体験

戦時中の一九四三年、能代中学一年生だった信昌哉さん（六一）は、軍事教練の十六里行軍で米代川の周辺を歩かされた。十一月三日、午前零時に出発、片道三十キロの往復。十二時間以内に戻らなければならぬ。遅れば落第が待っていた。

「体力が絶対の時代。とにかく時間内に戻らなければと必死だった」

足袋に草鞋。少しでも足のマメを防ぐと草鞋の紐に布を巻き付けた。約九時間で完歩。帰りの列車では曲げた足がもとに戻らないほど、疲れていた。

戦後もよく歩いた。北大の予科当時は、食糧難の時代。隣村の農家まで買い出しに歩いた。北海道の隣村はゆうに五キロはあった。じゃが芋や砂糖それにタバコを少しリヤカーに積んでひたすら歩いた。

少年時代は体力増進に、青年時代は生きるために歩いた。

「今はもう一キロ離れていれば、ついバスに乗ってしまう」

時も同じ十一月一日〜三日、埼玉県比企丘陵を舞台にして行われた第十五回日本スリーデーマーチに、信さんは参加した。三日間の合計距離は少年時代の行軍と同じ六十キロ。

五年前に定年を迎えた信さんは「なにか体がうずきだして。もう一度歩いて、今の自分を確かめてみたくなった」

ゴールも間近な川べりで、信さんは思った。「少年の日の六十キロ行軍は、オレの財産だね」と。